

BRICS の実力

最近では BRICS と言うと BRICS 首脳会議を指すことが多くなった。中国を中心にブラジル、ロシア、インド、南アフリカの首脳による政治的な集いだ。アルゼンチン、イラン、エチオピアなども参加を表明している。

だがそもそも BRICS は経済発展が著しく将来も期待できる代表的な新興市場諸国を指す経済的用語だ。2000年代初頭に使われ始めた。

現在の GDP（2022年）の規模でみると、中国、インド、ロシア、ブラジル、南アフリカの順になる。メキシコは入っていないが、GDP ではブラジルと南アフリカの間になる。

だが外国為替の取引量でみると様相は異なる。22年の BIS の調査では多い順に人民元、インドルピー、メキシコペソ、南アフリカランド、ブラジルレアル、ロシアルーブルと続く。

一般的に経済発展が続けば為替取引量は多くなる。貿易取引や資本取引が多くなるからだ。それに投機取引も加わる。だがそこに規制が加わると取引量は制限される。規模の割には取引量が少ないのは資本取引などの規制が多いためだ。

その点からみるとメキシコペソは比較的規制の少ない通貨と言える。逆にロシアルーブルは規制の多い通貨になる。特に昨年のウクライナ侵攻開始以来ロシアの規制は多くなった。それはロシア側が課す規制と外国に課される規制の両方ある。対照的な両通貨の動向を探ってみる。

メキシコペソは対ドルで上昇トレンド（ドルペソで下落トレンド）にある。直近のドルペソは17.03水準だが年初からは13%ほど下落している。（ペソ上昇）しかも大きな戻しのないステディなトレンドだ。金利差、フレンドショアリング、出稼ぎ先の米国からの送金などがペソ高の要因だ。この構図はしばらく続きそうだ。

一方ルーブルは対ドルで下落トレンドが続いている。年初来27%の下落だ。特に7月になるとドルルーブルは90を超え、直近では90.40水準だ。ルーブルはロシアのウクライナ侵攻後急落したが、その後は戻し比較的安定した相場が続いた。資本規制などで資本取引が細り、為替レートは貿易取引の需給に大きく影響されるようになった。そうした状況の中、エネルギー価格の高騰でロシアの輸出は伸びルーブルを支えたからだ。

だがそうした構図が明らかに変わりつつあることをドルルーブルの90超えは示している。エネルギー価格の低下だけではなく、制裁逃れの取引も当初より簡単でなくなり輸出減少の要因になっている可能性がある。その点ではエネルギー価格が高騰しない限りルーブル安トレンドは続く可能性が高い。

今後もルーブルの下落トレンドが続くとロシアの対外支払い額が増加し、インフレも加速する。経済的打撃が大きくなれば戦争継続は困難になる。その点ではルーブルの動向がウクライナ戦争のカギになる。